

EurekaXIII

六年制通信 No.7 令和7年5月16日(金)号

同じ人はいない

あまり考えたことはなかったのですが、最近になって静謐の反対語は軽躁ではないかと思うようになりました。昨今のニュースを見ていると世の中騒がしいにもほどがありますよね。愚かで利根的な犯行も多くなったように思います。そういう犯行で幼い子たちが犠牲になっているのを見ると実に腹立たしく思います。それ以外にも、とても大人の社会とは思えないニュースが溢れています。テレビは相変わらず右へ倣えの軽薄なコメントばかり。これ、じいさんの繰り言なのかもしれませんが、世の中が幼児化していると感じているのは私らの世代だけなのではないでしょうか。

こういう、精神が傷んでくるような感覚に襲われると、私は大人の書いた文章を読んで傷を癒すようにしています。だいたい小泉信三か内田百閒か阿川弘之ですけどね。小泉先生は平成の陛下、今の上皇陛下の教育係を務めた方で、元慶応の塾長ですから幅広くすぐれた教養をお持ちです。『平生の心がけ』などを読んでみると、大人の身の処し方とはこういうことだと教えられます。内田百閒や阿川弘之も文章が簡潔明瞭だしユーモアがあります。時流が変わると昨日とは真逆のことを声高に言う風潮が残念ながら日本の社会にはありますが、それはまるで子どものようであり、阿川さんたちの等しく嫌うことであるのも、私が読みたくなるゆえんかもしれません。

『平生の心がけ』を読んでいて、英単語の訳し方で感動したことがあるので紹介しておきましょう。中高生にはなかなか難しい語なのですが **appreciate** という、これは辞書を引くと「真価を認める」「鑑賞する」「感謝する」などと訳出される単語があります。この「感謝する」というのが曲者で、人を目的語に取れそうに思いますよね。しかしこの語は中に **precious** (貴重な) を含んでいるので、物事には使えますが人間には使えません。あなたに **appreciate** するとは言えませんが、あなたの親切に **appreciate** するとは言えるわけです。私は「正当に評価する」と教えることにしているのですが、小泉先生は「多とする」と訳してらっしゃいました。見事な訳ですね。「多とする」の『大辞林』の語釈は「価値の高いものと認める、ありがたく思う」ですからぴったりです。

また、別の話で、読んでとても真似できないと思った逸話があります。終戦後一、二年の頃ですから、まだ占領下での話です。あるアメリカ空軍の大尉が日本の学生の学資を助きたい、タバコもやめ倹約して少しでも捻出するから、誰か学生を紹介してほしいと小泉先生に相談があったのだそうです。先生は自分の目にかなった青年を一人紹介し、青年は無事大学を卒業し立派な技師になったのだそうです。そして、小泉先生は後から知ったそうなのですが、青年は大尉から援助をもらおうと決めた時から禁煙を

したのだそうです。禁煙し倹約して貯めたお金で援助してもらう自分が煙草は吸えないと言っていたそうです。いい話ですね。こういう、誰にも知られることのないであろう立派な振る舞いを、小泉先生も後世に残しておきたいと言っています。

さて君たち、この青年のように考え、実際にそのように振る舞うことができますか。私は自信がありません。見習うべき心映えですが、同じようにできなくても仕方ないと思います。悪いことをしてはいけませんが、自分よりも優れたことのできる人がいて世の中が出来上がっているわけですから、その立派さを **appreciate** できる心があれば同じことができなくてもいいと思います。同じ人間は一人としていないのですから。

聖書にも、同じ人はいないし、むしろみんなが同じでは困るのだということを書いてあるところがあります。『新約聖書』のコリント人への手紙の第 12 章 14 節から 26 節です。長いので抜粋して紹介しましょう。

体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでにおいかぎますか。……目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。……一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

コリント人への手紙は「愛の定義」が有名なのですが、私はここが好きです。人間関係に悩んだ時に読んでごらん。自分と同じ人間ばかりではダメなのだと気づくから。

今週のおすすめ

・山本周五郎 「思い違い物語」 『あんちゃん』(新潮文庫) に収録

普通、山本周五郎と言えば『さぶ』を推薦するでしょうね。しかし、今回は私の大好きな映画の原作として紹介しようと思いました。時代劇の原作ですからね、君たちには全く面白くないかもしれませんが。映画の方は「暴れん坊兄弟」と言います。古い古い映画です。私、おそらくほとんどのシーンを覚えています。おっとりとおおらかな兄とあわてんぼうで粗忽極まりない弟、その二人の活躍が描かれています。藩主から国元の不正を暴くよう命を受けた兄と、兄が心配のあまり殿に直談判して兄の後を追う許可を得る弟。亡き父の盟友のもとに寄宿するのですが、そこに娘が二人いるのですね。で、姉は兄に、妹は弟に恋をして…。最後、不正をして私腹を肥やす悪者を兄弟で懲罰し、藩主からその功により兄は城代家老に任ぜられる、と、まあ、王道の時代劇ですが、原作はずいぶん趣が違います。ただ、妹が弟の粗忽は兄を目立たせるためにやむなくわざとやっているのよと、泣きながら弟の肩を持つシーンがありまして、私はここが大好きなのですが、原作にもこのシーンはありました。もし興味があったら映画も探して観て下さい。君たちはどう感じるのかな、こういうお話。

BGMは 大黒摩季 の 夏が来る でした…。